

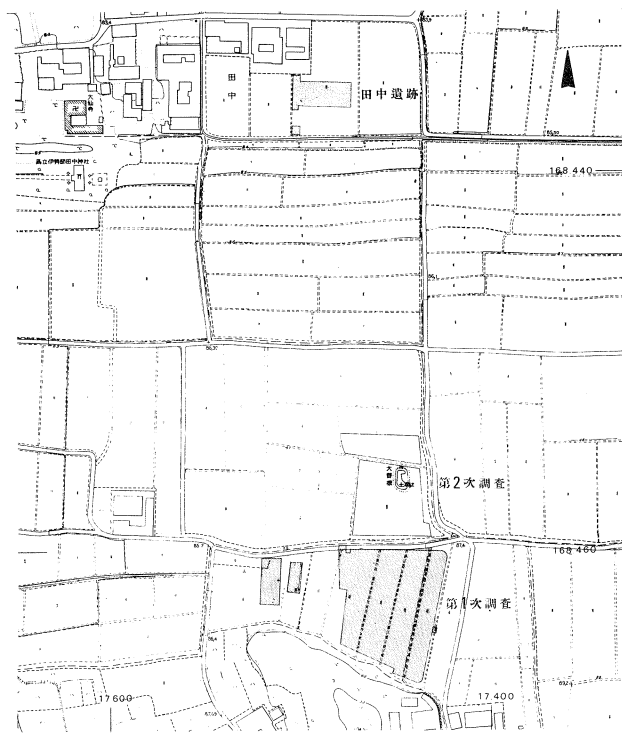
和田麿寺第2次の調査

(昭和50年10月～51年3月)

昭和49年夏に実施した第一次調査の結果、その北側に寺院中心部の存在が予想されたため、通称「大野塚」土壇を中心とした地域の発掘調査を行った。調査地は甘樫丘北麓の豊浦寺・小壘田宮推定地をへて北西に派生する低台地上に位置する檀原市和田町字トノンダ・柳田の水田である。

調査の結果、塔、築地、堀立柱建物、柵、井戸、土壇などを検出した。

〔塔〕 「大野塚」の土壇は、東西9.5m、南北14m、高さ1.7mの大きさで、やや南北に細長い楕円形をしていた。土壇上には、礎石が2個露出し、瓦の破片が多量に散乱していた。調査の結果、基壇上において、礎石3、礎石抜取痕跡3、根石群2を検出し、塔であることを確認した。塔SB200は東半部が破壊され、西半部が残存していた。



第14次 和田麿寺周辺地形図(縮尺 4000分の1)

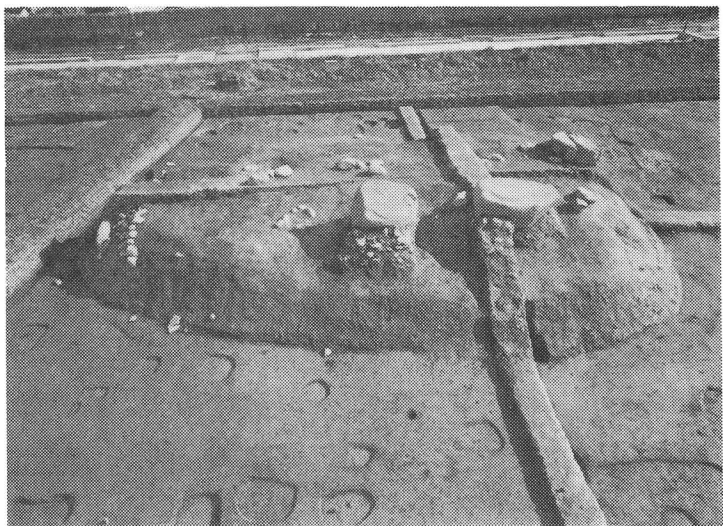
まず心礎跡として、土壇東辺中央部で、径1.5m、深さ1.2mを測る大型の礎石抜取跡と、その西よりに半円形に並ぶ根石5個を検出した。心礎抜取痕跡には、多量の炭化物と焼けた花崗岩片が散乱しており、心礎を焼いて破砕したことを示している。心礎抜取痕跡の西1.5mで南北に並ぶ四天柱跡の位置を示す根石2カ所を検出した。その北側には北側柱列の西第2とみてよい礎石抜取痕跡がある。この礎石抜取痕跡も焼けた形跡が

ある。また南側には、南側柱列の西第2とみられる礎石と露出した根石がある。礎石は南へ傾斜し、わずかながら原位置から移動している。四天柱列の2.4 m西側で、南北に並ぶ西側柱列の北第2、北第3にあたる2個の礎石、北第4にあたる礎石抜取痕跡を検出した。北第2、北第3の礎石は、いずれも西に大きく傾斜し、根石も露出している。また北第4の礎石跡では、礎石を焼いて抜取った痕跡をとどめている。

礎石は花崗岩製である。西側柱列北第2の礎石は、約1.3 m × 1.0 m、厚さ0.9 m大で、その上面に径0.72 mの円形柱座とその両脇に幅0.4 mの地覆座を造り出している。北第3の礎石は、1.5 m × 0.9 m、厚さ0.8 m大で、やはり同規模の円形柱座と地覆座を造り出している。両者とも、円形柱座と地覆座は、建物に隠れ、外から見えない部分の加工を省略している。また南側柱列の西第2の礎石は、1.1 m × 1.5 m、厚さ0.9 m大で、火をうけて上面が割りとられている。塔心礎の上面高は、四天柱及び側柱礎石の上面高とほぼ同一に復原できる。

基壇の築成方法は、旧地表面を40～50 cm掘りこんで、掘込み地業を行う。掘込み地業は、径15～20 cm大の礫を敷き、その上に褐色土と黒褐色土の混った土で25 cm程の高さまで、数cmずつつきかためる版築をおこない、再び同様の礫を敷き、さらに基壇上端まで版築している。掘込み地業と基壇の関係は、北面では掘込み地業の外側まで基壇積土が延びている。

現在する基壇の高さは、掘込み地業の面から1.3 mで、礎石を根石上に据え直して復原すれば、約1.8 mとな



塔SB200（西から）

る。基壇化粧石およびその据えつけ痕跡は検出されなかった。ただ、基壇をおおう表土および基壇の南 SX214 で延石とみられる凝灰岩切石が出土しているので、凝灰岩を使用していたことはまちがいない。

以上の調査結果からすれば、塔の規模は基壇化粧部分を除けば一辺 12.2m (約41尺) に復原でき、柱間は 3 間を 2.4 m (8 尺) 等間に割り付けられる。

〔築地〕 塔の南側で東西方向に走る築地 SA215 を 2.25m 分検出した。この築地の南側には小礫を埋めた径 0.5 m 大の穴があり、寄柱の礎石据えつけ痕跡とみられる。柱間は 3 m (10 尺) 等間で 4 間分残っている。寄柱をもとに築地基底幅を考えれば 2.1 ~ 2.4 m (7 ~ 8 尺) となる。軸線は方眼東西に対し、東で南に約 6° 偏している。築地の基壇は、弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層を掘りこみ、暗灰色砂質土と赤褐色粘質土とを交互にたたきしめて版築している。現存する厚さは約 25cm ほどである。なお、SA215 は塔の西側柱列の南延長線以東では、削平されており、残っていない。

〔掘立柱建物他〕 塔・築地の他に、掘立柱建物 22 棟、柵 4 条、井戸 1 基、土壇 1 カ所などを検出した。これらは、重複関係、建物の方位、柱穴の埋土の特徴、出土遺物などからみると 3 期に大別することができる。これらのうち I 期は、塔を造営する以前、II・III 期は塔造営以後にあてられる。

I 期 建物の方位が真北に近い I-1 期とわずかに北で東に振れる I-2 期とに細分できる。いずれも柱穴中に瓦を含まない。

(I-1 期) 塔の西で検出した SB260, SB280, SB315, SA325 などがある。SB260 は 3 間 × 2 間の東西棟で総柱の倉庫風の建物である。SB280 は 4 間 × 4 間で、正方形に近い平面の建物である。SB315 は梁行 2 間の南北棟で、桁行 2 間分を検出し、さらに南に延びている。SA325 は柱間 2 m の南北柵で 3 間分を検出した。南北方向いずれも調査地区外に延びている。

(I-2 期) 塔の西側で SB230, SB240, SB275 を検出した。SB240 は 3 間 × 2 間の東西棟で、SB260 と重複関係にある。SB230 は 4 間 × 2 間の南北棟である。SB275 は 3 間 × 2 間の南北棟で、総柱の倉庫風の建物である。SB295 と SB305 は、共に一部分しか検出していないが、建物となる可能性が高い。

Ⅱ期 建物の方位がいずれも北で西に偏する時期である。柱穴の埋土には瓦を含んでいる。2つの小期に細分できる。

(Ⅱ-1期) 塔の西で検出したSB270は4間×2間の東西棟建物, SB285は桁行3間で西にさらに延びる建物である。その南のSB225も梁行2間で西に延びている。SB290は2間以上×3間の東西棟である。SA330は柱間1.9mの南北柵で, 4間分を検出した。両端とも調査地区外に延びている。

(Ⅱ-2期) SB300は東廂をもつ5間×3間の南北棟建物である。SB320は3間×2間の南北棟建物で, 北妻柱の位置が東に偏している。

期	遺 構	柱 間 数	総 長 (m)		備 考
			東 西	南 北	
Ⅰ-1	SB260 東西棟	3×2	4.7	3.2	総柱 SB240より古い SB270より古い SA250より古い
	SB280 南北棟	4×4	5.6	6.2	
	SB315 南北棟	2以上×2	2.9	4.1以上	
	SA325 南北柵	3以上		6.0以上	SA330より古い
Ⅰ-2	SB230 南北棟	4×2	4.8	8.2	総柱
	SB240 東西棟	3×2	6.6	5.4	
	SB275 南北棟	3×2	3.5	4.5	
	SB295 南北棟	?×2	4.3	?	
	SB305 南北棟	?×2	3.4	?	
Ⅱ-1	SB225 東西棟	?×2	?	6.7	SB335より古い
	SB270 東西棟	4×2	8.1	4.5	
	SB285 南北棟?	3×?	?	6.5	
	SB290 東西棟	2以上×3	5.4以上	3.8	
	SA330 南北柵	4以上		7.6以上	
Ⅱ-2	SB300 南北棟	5×3	身舎 3.2 廂 1.7	7.8 7.8	東廂
	SB320 南北棟	3×2	3.5	4.2	
	SB335 南北棟?	3×1以上	2.8以上	5.1	
Ⅲ-1	SB190 東西棟	2×2	6.3	5.7	SA250より古い
	SA251 南北柵	4		11.2	
Ⅲ-2	SB210 南北棟	2×2	5.4	5.4	53.0以上
	SA250 南北柵	18以上			
	SE261 井戸				
Ⅲ-3	SB195 南北棟	2以上×2	4.4	3.2以上	南廂, 間仕切り
	SB220 東西棟	身舎 8×2 廂 6×1	身舎 14.8 廂 11.1	4.5 1.8	
Ⅲ-4	SB185 東西棟	2以上×2	4.7以上	5.4	
	SB235 東西棟	3×1?	4.7	3.8	

和田廃寺 遺構一覧表

Ⅲ期 建物の方位が北で東に偏する建物を建てた時期である。柱穴の埋土に黒褐色土と褐色粘質土が混入するか、褐色土がつまっているものである。柱穴に瓦を含んでいる。建物の方位の振れの度合と重複関係とによって、4小期に細分できる。

(Ⅲ-1期) 調査地域の南端付近で検出したSB190は、2間×2間の建物、SA251は、この時期に属するとみられるもので柱間2.7m(9尺)の南北柵である。4間分検出した。

(Ⅲ-2期) 柵SA250で区画する時期である。SA250はSA251と同じ位置を踏襲している南北柵である。柱間2.9~3.0m(約10尺)の等間で、18間分53mを検出した。南北両端ともさらに延びている。第1次調査で検出したSA130の西延長線とSA250の南延長線は直交し、その交点まで柱間を完数ではほぼ割り付けることができるので、SA250とSA130は一連のものである可能性が大きい。なお、SA250の3m西には同じ方向に走る柵SA255があるが、これは調査地域西壁の断面で検出したもので詳細は明らかでない。SB210は2間×2間の建物で、柱間が2.7m(9尺)等間の建物である。井戸SE261は、塔の西で検出したもので、井戸枠は残っていない。

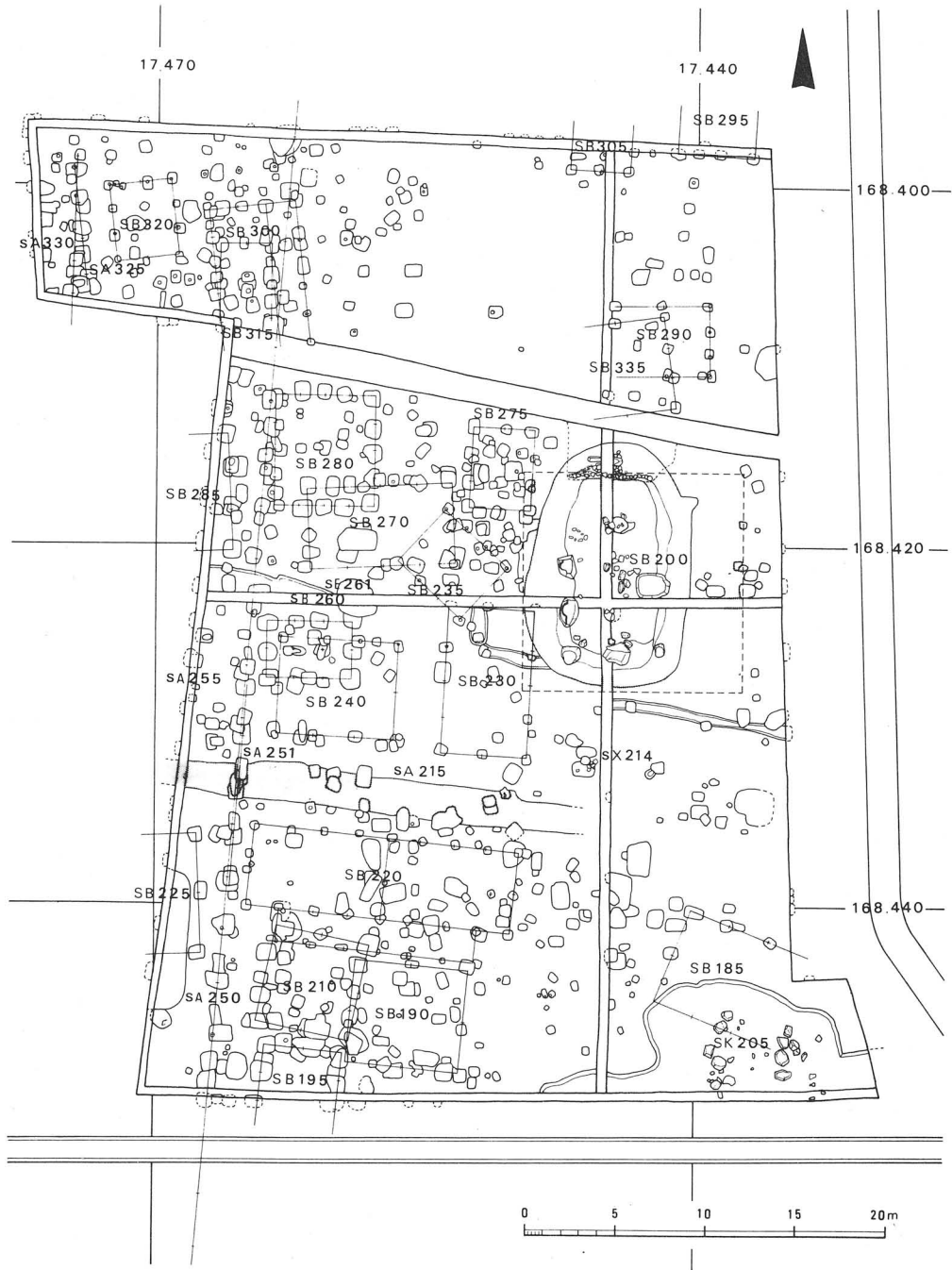
〔Ⅲ-3期〕 SB195は調査地域の南端で検出した南北棟建物で、梁行2間、



SA250(北から)

桁行は2間分確認しているが、なお南に続いている。その北に位置するSB220は8間×2間の東西棟建物である。南側に両隅を欠く6間分の廂がつく。身舎の柱間は桁行1.8m(6尺)、梁行2.3m(約7.5尺)である。廂の出は1.8m(6尺)である。柱掘形は一辺0.4mの小規模なものである。

(Ⅲ-4期) 東南隅で検出したSB185は2間以上×2間の東西棟建物で、さらに東に延びている。南半分はのちの土壌SK205によって破壊されている。SB235は3間×1間の



和田廃寺第2次調査遺構実測図

建物で梁間はかなり広い。一部には炭化した柱根が残っていた。建物の方位は北で東に大きく振れている。

そのほか、発掘区の東南隅にSK205がある。この土壌には大きさ1mほどの花崗岩と、20cm大の礫が多数投げこまれている。この花崗岩は、礎石を割ったものと思われる。先年、SK205の南延長部分で、排水路工事に伴って円形柱座を造り出した花崗岩製礎石が発見されている。ただし、この礎石は、塔の礎石の形態とは異なるので、付近に別の礎石建物が存在していたものと想定できる。

〔遺物〕 主な出土遺物には、瓦、鴟尾、埴、土器、円面硯、鉄釘、凝灰岩切石、加工痕のある榛原石がある。また、縄文時代の石棒、磨製石斧、弥生時代の石槍、磨製石庖丁、磨製石剣、サヌカイトの剝片、古墳時代の鉄斧、砥石、石製紡錘車、滑石製有孔円盤が出土している。

軒瓦は軒丸瓦が10型式161点、軒平瓦が7型式52点出土した。軒瓦の大半は塔跡表土層から出土している。軒丸瓦は、豊田廃寺出土例と同範と思われる単弁11弁蓮華文瓦が14点、豊浦寺・奥山久米寺出土例と同型式と思われる中房が半円球状に突出する単弁8弁蓮華文瓦が27点、その他飛鳥寺と同範のものなど、点数は少ないが飛鳥時代全搬にわたる各種の瓦が出土した。また、川原寺創建瓦と同範の面違鋸歯文縁複弁8弁蓮華文瓦が31点、中房の蓮子が2重にめぐる高麗寺・法起寺出土例と同型式の複弁8弁蓮華文瓦が80点出土しており、これら複弁蓮華文軒丸瓦2種で出土軒丸瓦の7割近くを占める。軒平瓦は4重弧文瓦が4点、上外区に細い線鋸歯文のある葡萄唐草文の退化型式と見られるものが1点出土している。また、6663型式が3点、興福寺・軽寺出土の6702-F型式が33点、平城京東三坊大路東側溝出土の6702-D型式が10点出土している。鴟尾は頭部の破



6702-D



6702-F

和田廃寺出土軒平瓦（縮尺 4分の1）

片を含む2片が出土した。いずれも第1次調査で出土した鴟尾と様式的に同じものである。

土器は、弥生式土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、白磁、瓦器が出土している。とくに発掘区の北半部では5世紀末から6世紀末にかけての土師器、須恵器が多量に出土しており、付近に集落跡を予想させる。墨書したものには、「大寺」と記した7世紀後半の土師器杯がある。緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、白磁、瓦器の大部分は、表土・床土層と、現在の水田畦畔にはほぼ沿って走る多数の東西・南北小溝およびSK205から出土した。

〔まとめ〕 以上、和田廃寺跡で検出した各遺構について記した。以下二、三の知見および問題点について触れておくことにする。

まず塔の築造年代は、7世紀後半と想定できる。その理由として、一つには基壇版築土中から、豊浦寺・奥山久米寺および法輪寺の塔心礎壇から出土した瓦と同型式とみてよい、中房が半円球状に突出する単弁8弁蓮華文軒丸瓦および同時期の丸・平瓦が出土していること。二つには塔および周辺から出土した軒丸瓦の70%近くを複弁8弁蓮華文軒丸瓦が占めていること。三つには、心礎上面と四天柱の礎石上面はほぼ同一高をなすことがあげられる。またその存続年代は、基壇上および周辺から出土する軒平瓦のうち、奈良時代後半の軒平瓦がその80%を占めており、この時期以降の軒瓦の出土が皆無に近いので、8世紀後半までは少なくとも存続していたと考えられる。なお、塔の礎石に関連していえば、現在豊浦の向原寺門前に置かれている花崗岩製の礎石は、かつて和田廃寺から持ち運ばれたものと言われている。その大きさは $1.5\text{ m} \times 1.2\text{ m}$ ほどで、上面に径 0.72 m の円形柱座に直角方向に交差する2方向の地覆座を造り出しており、隅柱の礎石と考えられる。この礎石も外から見えない内側の加工を省略しており、今回塔で検出した礎石と極めてよく似ている。したがって、塔の隅柱として使用していた可能性が高い。

つぎに、SA215の築地は、塔に伴う可能性もあるが、方位からみて、I-2期の掘立柱建物に伴うこともあり得る。前者の場合、回廊ではなく塔を囲んで築地がめぐらされたことになる。後者の場合では、区画された建物群の性格づ

けが問題になる。築地と塔の心々距離は13m、化粧石部分を除く基壇南端との距離は7.2mとなる。いずれとみるかは、なお検討を必要とする。また、飛鳥時代後半に位置付けられる軒丸瓦が出土軒丸瓦の約30%を占めており、塔建立以前に、寺院に関する他の遺構が存在していた可能性がある。

つぎに、掘立柱建物の築造年代については、塔との関連がやはり問題になる。これらの建物が塔と同時に存在したとする積極的な根拠はない。むしろ塔は他の堂をとまなうことによって伽藍を構成したものとし、両者が同時には存在しないものとみる方がよいであろう。以上の仮定にたち、掘立柱建物群の年代を想定すれば、以下のようなになる。まずⅠ期の建物は、同じ特徴をもつ柱穴を塔の基壇下で確認しているので、塔の造営年代以前に求められる。それらの建物の多くは、6世紀末までの土器を含む包含層に柱穴を掘っているのです、塔建立以前の7世紀前半とみてよいであろう。Ⅱ期の建物は、柱穴に瓦を含んでおり、塔の廃絶年代に続く年代が想定できる。Ⅲ期については、「興福寺大和国雑役免坪付帳」によると、延久年間にはすでにこの地域が水田化されているので、それによって下限を押えることができる。したがって、Ⅱ期を奈良末から平安時代初期、Ⅲ期を平安時代前半頃とみて大過ないであろう。なお、土壙SK205が掘鑿された年代は出土土器からみると鎌倉時代と考えてよい。

ところで、「大野塚」を中心とするこの一帯については、「大野塚」を書紀にみえる「大野丘北塔跡」に推定する『大和志』の説や、「和田廃寺」を「葛木寺」に比定する福山敏男氏の説がある。前説については、塔の造営時期が7世紀後半と考えられるので問題があり、後説についてはそれを確定する材料は得られなかった。

なお、文献上では、この地域から石川にかけた地域は、蘇我氏およびその一族が集中して居住したとみられるところである。塔の造営に先だつ第Ⅰ期の掘立柱建物群は、こうした有力氏族が、みずから居住する地域を寺域に転化した可能性をも含んでいる。

また、和田廃寺は、藤原京の条坊でいえば、左京一坊十二条に位置している。和田廃寺の寺域と条坊との関連についても、今後の調査に期待したい。